



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.200
2020.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第33回 ● 雲形模様のコロボックル・コード論

「コロボックル風俗考」からの新機軸である「コロボックル・モダン」は、モースの如く画工標本のみに留まる事は無く、「アイヌ模様」と「貝塚模様」の違いが「わかる」考古学の方法として「模様文法論」を構築する。その上で坪井正五郎は新たに「コロボックル・コード論」と称すべき形態学の高度化を図り、「大腿骨形「繰り返し筋違ひ模様」(明治34年7月)を開陳する。そこでは「模様文法論」との違いも強調し、「裝飾意匠の比較は(中略)人種的縁故の遠近を明かにするに於て大に参考となります。」(ゴチック体は引用者。以下、同様)と前置し、「尚ほ進んで模様の成り立ちに関する考へを述べると云ふ迄の事は致しませんでした。本編に於ては此方面の研究の緒を開く事を試みる積りであります。」と明確に「コロボックル・コード論」の意義を位置付ける。

畢竟、加曾利B式突起の「類似度順序形態学」を経て、以下に触れる「雲形模様」の「コロボックル・コード論」に至る方法史の展開は、「コロボックル・モダン」として日本考古学の近代化を見事に総括している。

「コロボックル・コード論」の成立に沼田頼輔の「把手の分類」が果たした役割は大きい。突起・把手は芸術性の高い制作物故に変化のプロセスが特定し易く、実際に「大森式」は簡単な突起を始点とし、複雑化へと進む形態変化を辿り、「都式」は複雑な「人面に模したるもの」を原形と特定し、眼等省略化へと進む形態変化を導出する。この2形式に観る変化の方向性や原形の特定という形態学的視点を参考事例として位置付けるならば、「貝塚模様」の分析にも必須の要件となる。

坪井正五郎は陸奥國上北郡アイノ澤遺蹟の「雲形模様」(第39図上段)を選定し、「コロボックル・コード論」の典型モデルとする。

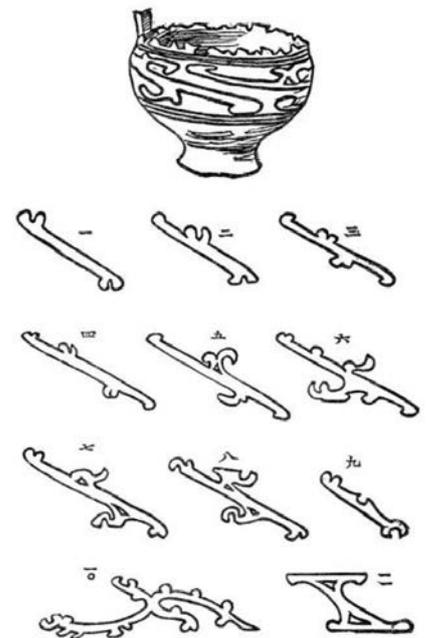
「雲形模様」自体は突起・把手と同様に芸術性の高い彫刻的な技法である。しかも「是等の雲形模様は一見甚だ複雑の様では有りますが好く好く注意して見ると大概皆筋違ひ模様の繰り返しから出来て居る」ことにより「繰り返し筋違ひ模様」と命名する。ここに「模様」に加え、付加される「繰り返し」と「筋違ひ」という二種の形態学的鍵語が生成される。

「模様の成り立ち」では先ず変化の要因を確認するが、それは「筥先で作った自在書きであれば、変化は生じ易い事」、「末端の玉の大小や中間の枝の長短が種々に変化するのは当然の事」、「同一の器」と「別の器」による違い等種々を「動作連鎖」による変化とし、次に第39図下段の全体配置を観る。(三)(九)の亀ヶ岡、それ以外はアイノ澤の諸例を用い、上段のモデルを(五)とし、それを起点として(四)→(一)は簡単な方向、(六)→(八)は複雑な方向、(九)(一〇)(一一)は「稍異なったもの」とした上で、「是等の筋違ひ模様の成り立ちを見るのに主な部分は斜めに書かれた棒で有りまして、此両端や中間に種々な変化が施して有る」と配置等の意味を概観する。

その上で坪井正五郎は形態学的手続きとして始点の仮設と変化の方向性検討に当たり原形モデルの特定プロセスも同時に組み込む等、人類学的素養が全開する。先ず、11種のモデルを「最も簡単なものは(一)」とし、全ての具体的な解説に及んだ後、「比較して見るのに相互の間に何等かの関係が有らう」とする。次にこれまで通り変化の方向性を3種<簡単→複雑>/<複雑→省略>/<一つの基本→簡単と複雑の両方>に分けた場合、始点が複雑な諸例では「何を象ったとも思はれません」と原形としての意味無き点を訴求し、「簡単なものが原形で有るとすれば(一)の如きは最も初の形で鳥類或は哺乳類の大腿骨

を模したものと想像される」と特定し、器面の「余地の形と其廣さとに由る」裝飾効果には「隙を充す為に原形に付け加えを仕た」等「自在書き」による多彩な変化を措定する。

そこで愈々「次に考へなければ成らぬのは筋違ひに画く事と其方向の主として左の上から右の下へ走って入る事とて有ります。」と、「繰り返し」と「筋違ひ」との鍵語が検討の俎上に置かれるが、土器の器面への「自在書き」の扱いはこれまでの類似の形態学とは全く異なる。即ち、書き手目線に従い、縦に書いては好い形に納まり期らず、(中略)横長に書いては(中略)模様の要部が隠れ勝ちに成ることから「筋違ひ」を説明し、「向きが左上右下に殆ど一定」となるのは右利きの「繰り返し」と人類学的な考察を開陳する。こうして「模様の成り立ち」が示す「自在書き」の変化は遂に人類学的な「動作の形態学」へと至る。



▲第39図 大腿骨形「繰り返し筋違ひ模様」モデル図

※巻頭連載は隔月です。次回は太田裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 雲形模様のコロボックル・コード論(第33回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 こののはじまり(第26回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第193回) 柴田拓也 …3
■考古学者の書棚 『殺生と戦争の民俗学 柳田國男と千葉徳爾』 近藤 敏 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「…それでは 何だ」(第26回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・圀勝・圀依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(3)

先回の最後にもお断りしたことだが、今回もいますこし則天文字「圀」字について触れておこう。既に先回も記したように10世紀以降は、数字残っていた則天文字も、ただ「古字」とか由来不詳となっていた点は、吉川弘文館の『国史大辞典』を見ても分かるが、江戸時代には、現実にはどれほど、どのような意味で使用されていたのかは分からない。なぜ水戸光圀がわざわざこの文字を使ったのか…光圀は50才頃からこの文字を使用したということだが、そうなると何か意図もありそうに思われ、少々脱線…

現在、真備祖母骨蔵器を所蔵するのは、出土地に近接した圀勝寺、この寺名を見れば想像がつくように、骨蔵器銘内の真備の父・圀勝の名にあやかっただけのもの。これは骨蔵器発見より30年ばかりも後に、江戸時代の領主板倉氏によって『吉備公太夫人古冢記』が作られ、骨蔵器や出土遺骨保管の社が寺内に造られ、寺名も圀勝寺と改名された。これによって、広く世の好事家に骨蔵器の存在も知られたと言う。寺は出土地の山塊続き、出土地点より直線距離では1km余の北西の位置で、小田郡矢掛町東三成にある。

この寺の名が現代でも「圀」勝寺で通用しているのであれば、少なくとも寺の名称として、江戸時代頃には他にも「圀」字の付く寺銘は無いかと思ひ、先ず近いところからと、手許にあった『岡山県古文書集』1~4巻を開いてみた。この本は、岡山大学設立時(1949年)からの日本史学科で、私個人には恩師でもあった、藤井駿・水野恭一郎両先生が、長期にわたり県下で収集・編集された主要資料集であった。

この中の4巻(1981年 思文閣出版)に、備前市浦伊部の寺、浄光山妙圀寺文書が「圀」字で書いて集成されていた。この寺は京都山科にある日蓮宗本圀寺派の寺であった。

この両寺に、少々失礼ながら、電話で「圀」字使用の由来などを伺ったのだが、この字が則天文字に関わる点は一切聞かれなかった。とくに本圀寺では、日蓮宗関係のものにこの圀が使用されているものがあるが、普通の國字も使っているとのことだった。ちょっと徳川光圀さんとの関係を聞いて見ると、寺内でその点を詳しく今調べている者もいるが、すぐには対応出来ないとの事。ただ話しのなかで、本圀寺の釣鐘には、圀字が使用されており、この鐘は、豊臣秀吉の姉、高野山で自害した、秀吉の養子・秀次の母親の寄進とか。また関係ある他所の釣鐘を製作した者の名前に「圀」字があり水戸光圀のほうが、これにならったのではないかと。本圀寺が光圀さんから「圀」字をもらったという説は、全く違うという点は強調された。というのも、インターネットなどには、こうした説が書かれているからだろう。いずれにしても「圀」字の由来にはならない。とりあえず色々、教示いただいたのは、以上のようなことであった。

実は釣鐘には、「圀」字を使うものが多少あることは知っていた。秀吉の名前が出たので、京都の高台寺の慶長11(1606)年銘鐘に「大日本圀」とあるのも思い出した。坪井良平著の『慶長以前 日本古鐘銘集成』(1972年 角川書店)で見ている。また同書には、京都の清涼寺の文明16(1484)年銘鐘には、

「山城圀」とか「圀土安穩」などあった。

前回以来、則天文字にこだわり過ぎた。本題は今まで注目されることの無かった「夫人」の文字だと思っている。現代社会では何の抵抗も無く「ご夫人」と言う呼称は、少々改まった言葉で、特に既婚または一定年齢以上の女性に対する普通名詞であろう。しかしその持つ意味が、そのまま奈良時代に普通に用いられていたのだろうか。

今回の問題では、まず奈良時代のしかも土中より出土が明確な、墓誌に刻まれた文字である以上、時代に間違いはない。同様なわが国の正確な墓誌出土例は16点ばかり、女性を示す文字のあるのは真備祖母を入れて5点に過ぎない。とりあえずその事例から見ていこう。またこれらの資料に関しては、先回の「富比賣」検討と重なる部分も多く、参考文献も先に述べた『日本古代の墓誌』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編集(1979年8月)である。以下は簡略にそれぞれ銘文中の女性呼称のみ記載した。(その1) 船王後墓誌 天智7(668)年 夫婦合葬「…婦安理故能刀自…」とある。妻のことを婦とし、女性呼称は刀自である。夫は渡来系で位大仁、品第三(この墓誌は8世紀初頭ごろに埋納の可能性ありとされている。)

(その2) 真備祖母骨蔵器 和銅元(708)年。「…下道圀勝弟圀依朝臣右二人母夫人」子の圀勝は右衛士少尉

(その3) 伊福吉部徳足比売臣の骨蔵器、彼女の死亡は、吉備真備祖母と同年だが、火葬にされて埋葬は2年後の和銅3(710)。従七位下、女性呼称は「比売臣」

(その4) 山代忌寸真作墓誌 夫婦合葬 「…又妻京人…蚊屋忌寸秋庭…」妻とのみ。女性呼称はない。夫婦共に忌寸姓で渡来系、夫は従六位上。戊辰年(738)年(神亀5年と推定)

(その5) 紀吉継墓誌 「…紀氏諱廣純之女吉継墓志」この「女」は娘の意味。女性呼称なし。父は参議従四位下、勲4等、延暦3(784)年

僅かな墓誌の例だが女性呼称で夫人と同類は刀自のみ、他には見られない。少々面倒でも、当時の状況を他の資料から見なければならぬ。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 193

斑鳩大塚古墳 ～奈良県生駒郡斑鳩町

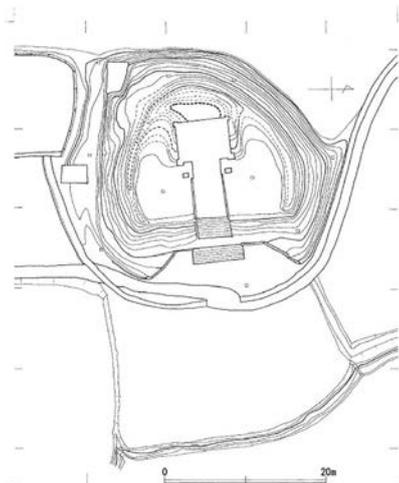
柴田 拓也

私が紹介する遺跡は大学在学中、調査に携わった斑鳩大塚古墳である。この古墳は調査を通じて、発掘調査や、それ以外にも活かせることを教えてくれた。

斑鳩大塚古墳は奈良県生駒郡斑鳩町に位置する古墳時代中期の古墳である。当古墳の周辺には「法隆寺地域の仏教建造物」として世界文化遺産に登録されている法隆寺や法起寺がある。また、中宮寺や法輪寺などの寺院のほか、多くの古墳も存在している。周辺の古墳の主なものに駒塚古墳(古墳時代前期後葉)、瓦塚古墳群(古墳時代中期)、藤ノ木古墳や春日古墳(いずれも古墳時代後期後半)があり、藤ノ木古墳からは国宝に指定されている金銅製鞍金具などが出土している。さて、当古墳では1954年に発掘調査が行われており、埋葬施設である粘土槨や銅鏡、筒形銅器、石釧などの副葬品が出土している。その後、長らく発掘調査が行われることはなかったが、2013年8月の斑鳩等教育委員会と奈良大学共同の測量調査の後、4次に渡って発掘調査が行われた。

調査の結果、斑鳩大塚古墳は直径約43mの円墳で、東に幅約11.5m、長さ約3.4mの張り出し部をもつことがわかった。この張り出し部は造り出しであった可能性もあるが、削平を受けており確定できない。1954年の調査時には周濠がないと

考えられていたが、古墳の西側で幅8.9m、深さ0.8mの周濠を確認した。また、古墳の北側でも、幅8m以上、深さ0.8mの周濠を確認している。現在の墳丘の大部分は1954年以降に盛土されたものであることがわかった。周濠埋土の上層からは飛鳥時代後半頃の土器が多数出土しており、周濠の埋没年代は7世紀後半と考えられる。



▲斑鳩大塚古墳 墳丘測量図

周濠埋土からは川西編年Ⅲ期に相当する円筒埴輪や朝顔形埴輪、蓋形埴輪や家形埴輪といった形象埴輪も出土した。蓋形埴輪と家形埴輪は複数個体に分かれ、墳頂部には一定量の形象埴輪が樹立されていたと考えられる。

また、1954年の調査で出土した筒形銅器は日本での出土が僅か50数点ほどしか確認されていない。韓国の大成洞・良洞里・福泉洞古墳群からも多数出土しており、古墳時代の日韓交流を探る上で重要な遺物である。

以上、簡単に斑鳩大塚古墳の調査成果をまとめたが、ここからは私と斑鳩大塚古墳の関係についてお話ししたい。全ての始まりは、私が大学2年生だった2013年6月頃に遡る。当時、私は筒形銅器に関心があったのだが、4月に着任したばかりの



▲拡張した調査区での作業

豊島直博准教授(当時)に「筒形銅器が出土している古墳を掘りたいか?」と聞かれ、迷わず「掘りたいです!」と答えた。何気ない会話だった上、この会話で豊島先生が斑鳩大塚古墳の調査を決めたわけではないと思う。しかし、振り返ってみれば、この会話が私と斑鳩大塚古墳の関係の始まりだったのだろう。その後、私は2013年8月の測量調査から2016年2、3月の第3次発掘調査まで参加した。私と斑鳩大塚古墳の関係の中で最も大きい部分を占めているのは、2016年2、3月の第3次発掘調査である。私は複数の調査区のうち、斑鳩大塚古墳の張り出し部の規模を確定するのに重要な調査区を担当した。(余談だが、他の調査区を担当する同期と晩飯を食べながら何度も意見交換をしたのは良い思い出である。)しかし、肝心な部分が後世の遺構によって失われており、困り果ててしまった。何しろ、そのことが判明したのは調査終了まで約1週間となった時で、残り時間がほとんど無かったからである。そして、結論を絞り込めないまま迎えた調査終了5日前、他の調査区の埋戻しが始まっていたが、私は調査区の拡張を決めた。3年間付き合ってきたこの古墳の規模を自分の手で明らかにしたい、そんな思いがあった気がする。最終的にくびれ部と考えられる地山の落ち込みを確認し、私の斑鳩大塚古墳の調査は終わった。その後、私は文化財に携わる者の1人として現職についている。

今の自分の根幹には、間違いなく斑鳩大塚古墳の調査で学んだことが存在している。それを表すのは、調査区拡張以来、先生に呼ばれるようになった「諦めの悪い男」という呼び名である。仕事やプライベートでは様々な理由であきらめざるを得ないことがあった。それは自分の力不足によるものもあれば、他の理由によるものもある。その度に先生の言葉を思い出して自分に喝を入れてきた。現職でも遺跡の調査に従事しているが、調査の成果を充実させるためには知識や技術だけでなく、「諦めない」ということも重要なのだと思う。

話が逸れたが、1人の人間に調査を通じて大きな影響を与えた遺跡、斑鳩大塚古墳を今回の紹介で多くの人に知っていただければ幸いである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは小堀 僚さんです。

考古学者の書棚

「殺生と戦争の民俗学 柳田國男と千葉徳爾」

大塚英志 著／角川選書(2017)

近藤 敏

柳田國男(1875~1962年)は日本民俗学の祖であり、私の世代の考古学を学ぶ者は、一連の著作には必ず触れていました。学生時代、先輩から、「柳田國男の文章は素晴らしいから、よく読んでその文章を真似て書くと勉強になる」と、諭された記憶があります。それ以来、私の文章は全く上達しないものの、折に触れて著作は読んでおりました。近年柳田國男の業績は、多方面から再評価されており、その関連が多く出版されています。

2019年11月16~17日に、浅間縄文ミュージアムに拠るシンポジウム「Hunting狩猟相解明のためのアプローチ」が、開催されました。主催者の熱意で考古学のみならず民族、自然科学、民俗学研究者が集い、幅広い研究が公開され、参加した学生の中にも民俗学を学ぶ者がおりました。懇親会の際、その学生との間で、千葉徳爾著「狩猟伝承研究」が話題にのぼりました。

その「研究」は大著にまとめられ、博士論文の正篇(828頁1969年)・続篇(590頁1971年)・後篇(537頁1977年)・総括篇(486頁1986年)・補遺篇(366頁1990年)そして、再考篇(345頁1997年)と全6冊として、順次刊行されています。その各章立てまでは記載しませんが、再考篇の最後が調査技法の問題『「聞き取り」という調査方法について』となっています。その研究は晩年まで続き、ほぼ30年に亘り千葉先生は、研究成果の刊行に尽力されていたのです。40年前、私が通っていた大学で、千葉徳爾(1916~2001年)先生による民俗学の講義があり受講しておりました。受講したのは1980年前後なので、65歳前後の千葉徳爾先生は、和やかな笑顔に深い皺があったと記憶していますが、先生のお顔の記憶はあるものの、聴講内容は頭から消え去り、当時のノートを探すこともできないでいます。

今回取り上げるのは、「狩猟伝承研究」ではないのですが、先生の評伝を読むことによって、そのライフワークの結実、当時の社会的背景と今日的課題の理解がより深まると考えます。紹介の第一章の冒頭には、「さて、改めて本書はぼくの民俗学上の師である千葉徳爾の学問をその愚かな教え子が理解しようとする試みである。」と記しています。それが、『「殺生と戦争の民俗学」柳田國男と千葉徳爾』です。出版当初に朝日新聞の書評で紹介されていました。その本の帯には、『「聖セバスチャン殉教図」に「殺生の快楽」を見いだした師・柳田國男。己の「殺生

の快楽」への欲望を起点に「戦争の民俗学」へと分け入った弟子・千葉徳爾。三島由紀夫の自死に奇書「切腹の話」で応えた怪物的民俗学者の「学問」を現在に問う。戦場で人は何故、残虐なのか?と、鮮烈な「聖セバスチャン殉教画」と共に印刷されています。そこには、民俗学者千葉徳爾の研究と出自過程が綴られています。本書の構成は以下のとおりです。

●序章 千葉徳爾『切腹の話』を読む ●第一章 『山の人生』とワンダーフォーゲル ●第二章 青年運動としての民俗学 ●第三章 殺生の快楽 ●第四章 戦場の民俗学者 ●第五章 実験の史学という問題 ●第六章 「固有信仰」としての残虐性 ●第七章 環境の民俗学 ●第八章 コラージュする民俗学者 ●第九章 「閃き」と「排泄」の学問 ●第十章 日本民俗学の「頹廢」と何か ●第十一章 千葉徳爾のロマン主義殺し—再び「聖セバスチャン」殉教画をめぐる ●あとがき B6判 全390頁

第一章は、千葉徳爾が少年時代に柳田國男の著作に最初に触れたことから始まり、その『山の人生』が柳田と千葉を結びつけ、最期の千葉の著作が『新考 山の人生』であったことについて論考されています。第二章は、先の大戦の戦前から戦中の研究者と国策について述べられ、「オスワルド・メンギーン『石器時代の世界史』上巻・聖紀書房1943年」の訳者である当時民族学研究所にいた岡 正雄(1898~1982年)と、柳田國男との関連が記されています。第三章は、スプラッター映画的な内容ですが、柳田の『後狩詞記』、千葉の『切腹の話』を介して、狩猟習俗や戦争の残虐性ととも論じられています。

第四章は従軍体験とソビエトでの抑留後、1947年に帰還した千葉が、1948年に柳田の許に再入門したことを綴っています。対して柳田自身は従軍経験がなく、柳田の文学仲間の田山花袋等は、従軍を経験して小説等を執筆しています。戦争の渦中にいた千葉と柳田の体験は、感性の違いを生み出したと考えられます。字数の関係で、五章以下の概略は省きます。

著者はあとがきの最後に、『「略・柳田から千葉に継承された「内省する学問」の向かった先が「殺生と戦争」であることだけはどうしても示しておきたかった。文学とも哲学とも社会学とも違う流儀の、「社会を内省する作法」として、かつてこの国では民俗学は目論まれ、千葉徳爾という人はそれを受けとめ、教え子でもあるべくも、こうしてそれを受けとめようと未だ右往左往しているのは、「内省する社会」をいかにつくるかという問いが、現在進行形だからに他ならない。』と記されています。本書著者の大塚英志氏は、過去40年来叫び続けられている大学での学際的研究については懐疑的であり、「役に立つ学問」とは何かを我々に問うています。



アルカ通信 No.200

発行日 2020年5月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp